

小 論 文

2023 年度（令和 5 年度）

入 学 試 験 問 題

受 験 番 号	
---------	--

注 意 事 項

- (1) 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- (2) この問題冊子は 1 ページあります。問題は 1 問です。
試験中に、問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れなどに気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- (3) 問題冊子の表紙の受験番号欄に受験番号を記入してください。
- (4) 解答用紙の受験番号欄に受験番号を記入してください。
- (5) 問題冊子のどのページも切り離してはいけません。
- (6) 辞書機能や計算機能、通信機能などをもつ機器等の使用は禁止します。使用している場合は不正行為とみなします。
- (7) 試験終了後、解答用紙はもちろん、問題冊子も持ち帰ってはいけません。

問 次の文章を読み、傍線部(1)について、あなたはどのように考えるか 800 字以内で述べなさい。

人間の見識や品格は、難しい議論をすることによってのみ、高くなるものではない。禅では、悟りなどといって、その理屈はたいへん奥深いものであるとのことだが、その坊さんのやっていることを見れば、現実から離れていて役立たずである。現実的には、ぼーっとして何の見識もないに等しい。

また、人間の見識品格は、ただ、広い知識をもっていることによって高くなるものでもない。たくさんの本を読み、広く世間の人と交際していても、なおも、しっかりと自分自身の意見が持てないものもいる。古い習慣を守る儒者などがこのタイプだ。

ただ、儒者のみではなく、洋学者であってもこの害は見られる。いま、西洋の日に日に進歩する学問に志して、ある者は経済書を読み、ある者は修身*論を講じ、ある者は哲学、ある者は科学と、日夜、精神を学問に没頭させ、その苦学のように、まるでイバラの上に座って痛みをたえられないはずなのに、その人の私生活を見てみると、決してその学問どおりではない。経済学の本を読みながら自分の家計もどうにかできない。口では修身を論じていながら自分の身を修めることも知らない。その言っていることとやっていることを比較すると、まさしく別人のようで、一定の見識があるとは思えない。

結局、こういうことだ。このタイプの学者であっても、自分が講義をしたり読書していることを否定しているわけではない。しかし、正しい物事を正しいと判断することと、その正しいことを実行することとは、まったく別のことなのだ。正しく考え正しく行動できるときもあるし、そうでないこともあるのだ。「医者の不養生」とか「論語読みの論語知らず」ということわざも、こういうことを言ったのであろう。

だから言うのだ。人間の見識品格は、深遠な理論を議論して高まるものではないし、また広い知識を持つことだけで高まるものでもない、と。

(1)では、人間の見識、品格を高めるにはどうしたらいいのだろうか。

その要点は、物事のようすを比較して、上を目指し、決して自己満足しないようにすることである。ただし、ようすを比較する、というのは、個々のあれこれを比較するということではない。こちらの全体と、あちらの全体を並べて、それぞれのいいところと悪いところをあまさず見なくてはならない。

(福澤諭吉著 齋藤孝訳『現代語訳 学問のすすめ』)

*修身—第二次世界大戦前の小学校などで、道徳教育を行うために設けられた教科の名前。昭和 20 年に廃止。